
「言葉の力」

高松・高松北中 三好海斗

「情けは人の為ならず」は、誤用が広まってしまっている表現でもある。3年生の授業で「ことわざ・故事成語・慣用句」の授業をしたところ、クラスの半数以上が、「人に情けを掛けて助けてやることは、結局はその人のためにならない」という意味で認識してしまっている。この慣用句の正しい意味は、「人にした親切がめぐりめぐって自分に戻ってくる」という意味がある。この説明を授業ですると、「言葉って深いなあ〜」というニュアンスの反応が多く返ってくる。勘違いが起きやすい原因のひとつに、意味の認識に変化が起きたことが挙げられる。現代における「情け」は「同情」の意味合いが強まっているが、実際には「思いやり」や「人情」の意味を持っている言葉である。それを知っていれば、意味を誤解してしまう可能性を避けられるだろう。ここに挙げたのはひとつの例であり、「言葉」は、毎日必ず使うものであるが、本当に難しい。しかし、ひとつひとつ言葉の意味や語源を知ること、その「言葉」が持つ「力」を強く感じられることが多くある。また、語源だけではなく、文学的文章では、作者の表現の工夫である情景描写や行動描写を、さらっと読み進めていきがちだが、それが登場人物の心情とリンクしていることに気づくと、一気に作品がおもしろくなることもある。実際に1年生の教材で、巧みな描写が多く用いられている安東みきえ著の『星の花が降るころに』の授業をしたところ、情景描写や行動描写の魅力に気づいた生徒が「この表現には登場人物のどんな思いがあるんだろう？」とひとつひとつの言葉にこだわって教科書をめくっている姿がよく見られた。その魅力のとりこになった生徒は、「教科書以外の小説はどうなっているんだろう？」と気になり、新たな作品を手にとるようになる。実際、全て

の生徒がそうなることは難しいが、そんな生徒が授業を通して、増えていくことこそが、我々国語教員としての大きな役割だと思う。

授業はもちろん、学級や部活動で子どもたちと関わっていく中で、パソコンやスマートフォンなどの情報機器の普及やコロナ禍の影響により、顔を合わせて会話する機会が奪われたことにより、子どもたちが使う「言葉」には「重み」がないように感じる。日々の生活記録等を見ても、「SNS」で返信するような単調な文章を多く見るし、子どもたち同士の会話を聞いても、平気で相手のことを考えられていないような発言もある。そういう現場を目にする度に、少し寂しい気持ちになる。

私自身、中学校の国語の教員として採用されて、8年目を迎えるが、国語の授業はもちろん、学級経営や部活動の顧問として子どもたちと向き合うときには必ず、「言葉の力」が必要になってくると強く感じた。それに気づいた私は、自分を動かす力を持った「言葉」に出合うために、書店に足を運び、タイトルが気になった本は迷わず、手に取るようになった。恥ずかしながら、学生時代まで全く本を読まなかった私が、今では1ヶ月に必ず2〜3冊は読むようになった。私は、5年前にもこの「国語科教育」の随想で「国語の先生だけれど、好きな著者や作品もない」と書いているが、今では好きな著者も作品もある。大人になってからでも「言葉の力」を感じられる。それによって「自分が成長できること」に気づいた私は、目の前にいる子どもたちに少しでも、「言葉の力」を感じてほしいと思い、自分が読み終わった本を「三好T文庫」として学年団の廊下に置かせてもらっている。朝の読書の時間にそこから本を手にとって読む子どもたちも増え、子どもたちと「言葉」との出会いに少しでも貢献できているのかなとも思う。今後も、「国語」という言葉を扱う教科を通して、生徒ひとりひとりに本気で向き合い、「言葉の力」を伝えられる、国語科教員であり続けたい。